

教材-子ども-教師のアッサンブラージュの生成変化 ーカレン・バラッドの主体实在論から教育実践を問い直すー

日本学術振興会特別研究員 PD・楠見友輔

背景と問題関心

主体实在論 (Barad, 2007) の核心は、データや現象をその外部に立って探求することが出来ないと考えることにある。研究者はデータ「を」分析するのではなく、データ「と一緒に」分析をする。主体实在論は、ポストヒューマニズムやニュー・マテリアリズムからの影響を受け、アイデンティティ、階層、カテゴリー、二元論、表象、媒介などを特徴とする近代的な思考様式とは異なる倫理-存在-認識論に立つ。本発表の目的は、主体实在論から教材の主体性を中心に教育実践を見た時に、教授と学習がどのように捉え直されるかを検討することにある。

日本の知的障害児教育では、古くから木や金属等の様々な物を組み合わせて作る教材が用いられてきた。本研究では教材の物としての特徴に注目する。主体实在論では、物と人間を対称的に捉える。つまり、物を受動的で静的で不活性な人工物、または、人間が目的を完遂するために使用する道具とみるのではなく、物をヴィブラントな (振動する、活気に満ちた) 主体とみなす。このように生き生きとした物を中心に据えることで、教育実践がどのように捉え直されるのかについて考える。

回折的方法論と分析

主体实在論では回折という思考方法を採用する。これは、省察や再帰性という社会科学的研究で採用されてきたオーソドックスな思考と対比される、思考のメタファーである。省察を通じた解釈は、研究者の主観から独立した客体の存在を前提とし、客体としての他者を反射板にして、同一性や否定

的な差異を再生産してきた。これに対して回折は、複数の波が干渉し合う現象であり、回折的方法論では、データと一緒に考えることで新しい概念を生産することを分析と捉える。本発表において回折は、物の主体性に光を当てる筆者の読みとデータが影響し合うことで、ステレオタイプの言説から離れて、教育についての異なる概念を創造することである。

本発表は、筆者が行っている研究プロジェクトの一部であり、原 (仮名、71 歳) という 1 名の教師の、教材についての 3 つの語りを回折的に分析する。原は 30 年以上、東京都の特別支援学校の教師として勤務し、退職してからも教材を作り続け、外部指導員として現役の教師に対して教材の作り方や教材を使った教授について指導をしている。立教大学の倫理審査委員会から研究計画の承認を受け、原から研究内容のインフォームド・コンセントを得た後、2 時間のオンライン・インタビューを 2 回実施した。インタビューでは、原はいくつかの教材や、教育実践の写真やビデオを見せながら、教材の制作過程、教材制作に関する考え、教材の意義等を自由に話した。

インタビュー後に、筆者は収集したデータを繰り返し読んだ。逐語録から、教材を構成する物の性質、教材全体の機能、教材がどのように他の物や人と影響し合い変化するかが語られている部分をハイライトした。そして、物を人間が使用する道具ではなく、他に影響を及ぼす主体と見た時に、教育実践がどのように読み替えられるのかを、ドゥルーズの思考を参照しながら考察した。

結果

第一に、「迷路」についての語りに注目する。原の迷路(図1)は、木

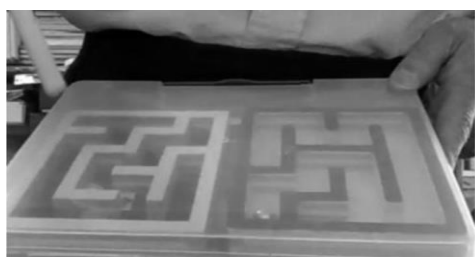


図1：原の迷路

製の板と棒、プラスチックケース、パチンコ玉、磁石によって構成される。子どもは、磁石が埋め込まれた棒を使い、パチンコ玉を通路に沿って動かす。ゴール地点につくと、パチンコ玉はゴール地点の床に埋め込まれた磁石に引き寄せられて棒から離れ、振動音を出す。迷路は良い音を出すという欲望に駆動されて変化した。結果として生じた良い音は、特定の器官からではなく、物と人のアッサンブラージュから生じていると考察された。

第二に、原が一連の「棒差し」を語る過程に注



図2：原の棒差し

目する。棒差しは、子どもの差異、教師の好み、状況、他の条件によって変化し、木、金属、磁石、ビニール、プラスチックのような多様な物と接続したり離れたたりすることを通して、様々な色、重さ、長さ、大きさ、肌触り、魅力、方向づけ、という影響を生じさせる(図2)。一連の棒差しは物の生成変化の過程を例示しているといえる。生成変化とは、法則や目標や予測可能な因果的メカニズムから逸脱する動きであり、教材の変化は一つの完成形への収束を目指すのではなく、多様に拡散していた。

第三に、教材を用いた教育実践についての原の語りに注目する。原は、退職した後も、様々な子どもとの出会いによって、新しい教材が生まれる

ことを指摘した。既に存在する物だけではなく、これからも生産される全ての物が教材のアッサンブラージュになる可能性があり、教材-子ども-教師のアッサンブラージュの生成変化には終わりが無いことが示唆された。

考察

教師の教材についての語りの回折的分析は、子どもの教育実践への貢献を強調している。すなわち、子どもが実践に関与しなければ、教材も教師も変化することがない。同様に、教師も、物も、教材-子ども-教師のアッサンブラージュの生成変化に貢献している。そして、教材-子ども-教師のアッサンブラージュの生成変化は、予めの目的を持つ変化ではない。ここでは、知識や概念は結果として生じており、教育実践は、情報伝達でも知識の説明でもなく、その時限りの創造とみなし得る。このような教育実践においては、教師の役割は、物を配置することで、非人称的な欲望に駆動されながら多様な物質性を教材に折り畳み、概念の創発を促進することにある。

目的に向けて進められる教育と比較して、物の生成変化に注目する教育は、再生産よりも生産を重視する。つまり、教育は、物や人間を予め規定された完成に向けられるのではなく、そこから逸脱し、実践における多様な物と人の接続と分離を通して多様な方向に拡散していく。それぞれが複数の物質性を含む教材-子ども-教師のアッサンブラージュの生成変化は単線的ではなく、機械状のアッサンブラージュとして相互形成する。

このような教育は、再生産的な教育を否定するものではない。それを一つの可能性として含みながら、合目的的で単線的な教育では見過ごされることの多い、それ以上(more than)の教育の可能性に目を向けさせるものであるといえる。

本研究は、JSPS 科研費 20J00219 の助成を受けたものである。